

降ってきた。セレナは胸が詰まったような気  
持ちになり、感謝と怒り、悲しみと恐れなど  
が無数に織り交ざった感情に襲われた。そし  
て気づかないうちに海沿いの崖まで歩いてい  
た。旧暦の十五日に近づいているせい、そ  
の日は偶々風が強かったからか、引き潮の流れ  
は明らかだった。ひんやりとした風に顔を  
撫でられ、心は侵食された。セレナは何かに  
慰めて欲しくてピンクのノートを取り出し  
最初から読み始めた。一文字も見逃すまいと  
読みつつ、二人の友情について考えていた。

「ねえ！何を見ているの？」

エリカの声がした。

